……　はしがき　……

世界中の白鳥の声を聞こう

―― 第二回総会から ――

日本白鳥の会会長　家　田　三　郎

山階鳥類研究所長のお話によれば，白鳥が保護鳥になったのは大正１５年であったという。当時の白鳥はよき獲物であって保護には狩人の反対がつよかったと今昔の感を述べられていた。白鳥胸毛は最高の羽布団の材料だといって満洲から輸入されており，現在は香港からくるとか。しかし保護鳥になった白鳥は余り庶民に知られず，越後なども佐渡に少しはきていたらしい。今から２０数年前，越後水原の瓢湖に突然白鳥が姿を見せ，吉川重三郎老が居つかすために，ついに給餌に成功して瓢湖は白鳥渡来地として国の天然記念物に指定されたのだったが今年で丁度２０年になる。給餌は２代目吉川敏男氏にうけつがれ，「コーイ・コーイ。」の呼び声は日本中の人々の関心事となったし，その白鳥の大きさとまつわる物語も手伝ってか，日本の各地に吉川父子と同じような人が出てきて，この白鳥の会となり，お互いの心にかかる事を話し合う。思うに庶民の間にツバメ保護の慣習は昔からつづいているが，これはおかみの力や教育の力がよりつよく感ぜられ，白鳥の場合は全くの庶民からの発想であって，吉川父子の「コーイ・コーイ。」が原点になるかと思われる。

白鳥は昔は日本のどこにもきてくれたらしく，山階所長はお話の中に江戸川柳の「白鳥が鳴いてさびれる根津の町」をのべられ，今年は品川と大森の間の大井に白鳥が１羽来て１カ月も居ついてくれたとかで昔のように東京にも白鳥のきてくれることを祈っていられた。浅草の寺の記録には白鳥のきたことが誌してあるというが，昔の物語や俳句には余りないように思われる。

ただ，古事記にはヤマトタケルが亡くなられると白い鳥になったとか，仲哀天皇の皇子が白鳥（クグイ）を見て口をきかれ，その鳥をたずねて臣下が越後方面まで来たとか，加藤周一は常陸国風土記に白鳥が少女になったり天女が白鳥になった記録のあることを述べているし，アイヌの守護神は白鳥だったとか，白鳥神社はアイヌに関係があるとか述べる人もある。維新の時，白鳥神社のある部落で官軍が白鳥を撃ち，村民がこれに抗した有名な白鳥事件が福島県にあるのだということ，そう云えば大正期の小学読本に，長者が餅を的にして矢を放ち餅は白い鳥となって飛び去り，その後長者が不幸になった物語のあったことも思い出される。昔は白鳥は神さまだったのかも知れない。しかし明治・大正時代には白鳥は撃たれた。それが昭和も戦争のあとに吉川老の給餌となった。吉川老は「自分も白鳥にならなければ」と２代目に云っているが，２代目の努力は白鳥を全くの身近くに呼び寄せたこと，いまでは見物の人々のそばにも白鳥は平気で遊んでいる。

更に大湊の白鳥は人間の口にくわえているパンを嘴で頂くほどになった。こうなると人間が白鳥になったのではなく白鳥が人化したようにも考えられる。そして，給餌は家畜化という昔からの教えが，多くの人々の間に思い出されて，自然のものは自然のままにということに気がつき，自然保護協会では給餌につ

いてのアンケートを本年度実施した。外国の国立公園では学者さえも入ることが許されていないところがあるとか。白鳥も自然の餌が問題となって水原ではクワイを植えている。もっとも人間が自分の家の周りに垣根をつくることは自分自身を自分で家畜にしてしまうことで，人間はとっくの昔に家畜であったという教示もある。

山階・吉井氏の話　「戦争と鳥類は人間に地理を教える。」「狩猟民族たる吾々が野鳥を愛護するということは文化の一つの進歩である」自然の餌のないときのやむ得ざる給餌，正しくは自然の餌の繁茂こそ必要であって，トヨアシワラノミズホの国こそ野生生物の天国であろうと微笑された。

環境庁では全国に３０いくつの渡り鳥センターを作り山階鳥研がこの仕事をうけもっているが，その一つとして標識をつける仕事をはじめている。これは鳥類の行動とその行動にともなう危険を客観視出来るのだという。新潟県では落鳥して保護されて元気になった白鳥に発信機をつけて放鳥して追跡をした。これによって白鳥の夜行性を確認されたし，その場に餌が多いと夜行しないことも判った。夜行による電線の危険は餌のあるなしも影響するのだろうか。落鳥を放鳥するときは各地でも標識をつけている。

総会での話。　白鳥の死。先年の北海道の多数の死，自然の餌と給餌が論ぜられた。うごけず凍えついた白鳥を襲う猛禽。自然の姿はわびしい。新潟では今年落鳥が２７。北海道は２。酒田は１であって，餌ともう一つ水の汚染のことも論じられ，死の沼の心配も論ぜられた。

当年仔，幼鳥，亜成鳥，成鳥の問題もむつかしく，英国のいう繁殖率とは何か。成鳥はいつ頃から卵を生むか。なかなかに学問的な話になった。種別の見わけもむずかしい。

白鳥は自分の鳥ではなくて，神の鳥だという余りの熱心さに対する苦言もあった。自然の開発は開発を生み，白鳥をよせつけぬ。貧しいみんなは途方にくれる。鳥に大切な湿原がなくなる。

環境庁の毎年１月の一斉調査では，一万数千の白鳥が日本の国内にいることになるが，４９年度は４８年度より少なくなっている。しかし，ここ数年次第に渡来数がふえているという。さいはての北海道では４月のある日に数千羽が集り，一晩にして北へ帰える。琵琶湖になぜ白鳥が来ないのか。

そしてみんなの心には一体，白鳥はどこから来てどこへ帰えるのか，そんな思いがつのって来た。シベリヤはどうなのか，ソ連の人々の話がききたい。

先年，英国のスリムブリッジに白鳥の国際シンポジウムがあった。これに吉川二代目と本会の本田事務局長がモア・ジョイ会のローゼ夫人のあっせんで何の資格もないのに招待された。そして会長のスコット博士が日本でもやってほしいといったとか，その直前に佐藤水原町長が訪問したときも，日本の風景をたたえ，こんどはぜひ日本でのシンポジウムをと，にこにことすすめたとか。思うに日本の鳥の８０％は渡り鳥で，日本は世界の渡り鳥の大国だということ。しかし，日本という名をつけさして頂いているわれわれの日本白鳥の会は片田舎の者ばかりで，甚だ微力でしかない。日本には，日本鳥類保護連盟，日本野鳥の会，日本鳥学会，山階鳥研，更には世界野生生物保護基金日本支部，自然保護協会，自然保護連合等いくつもの有力な団体がある。こうした団体の力で国際的な会が開けぬものか。そして最も重要なものに国際水鳥調査局（ＩＷＲＢ）がある。これには既に山階鳥研が日本を代表する参加団体であるとか，この会費が年間６０万円もするのに３０万円に負けてもらっての加入なのだとか，どの会も加入費は大きい負担であろう。

私はひそかに思った。いま神奈川県のある女性の方が自分で経営している喫茶店に竹筒を置いて人々から白鳥に対する寄附を入れて頂いていて，瓢湖の白鳥の会に時々送って下さっている。このようなことが全国的にできて，山階鳥研にも差し上げることはできないものか。

更に思った。毎日新聞社が百年記念に富士山麓に自然保護公園を作りはじめていて，協会ができている。ここにはすでに瓢湖で落鳥した一つが送られている。というわけでもないが，この協会からも助けて頂けないものか。

日本白鳥の会ができてから，1年に1度ではあるが会合のできること。遠く遥かなる同志とも語ることができるし，それにもまして白鳥のおかげで，片田舎にいても，共々に行動している子供達や世界を考えることができる。

吉川父子からの20年．恐らく何万という白鳥のきている日本，その白鳥のことで，シベリア，満洲，その周辺，そして米国，カナダ，英国，東欧の人々からも白鳥の話を日本においてききたいものだと思う。

日本白鳥の会第二回総会出席者名簿

来賓（敬称略）	
友田安雄	環境庁鳥獣保護課長補佐
桜井信夫	文化庁保護記念物課調査官
吉井正	山階鳥類研究所主任研究員
岩間一郎	富士自然動物園協会事務局次長
顧問（敬称略）	
山階芳麿	山階鳥類研究所長，日本鳥類保護連盟理事長
会長	
氏名	住所
家田三郎	新潟県水原町中央町二
副会長	
内田映	松江市国屋町510
理事	
松井繁	札幌市中央区北六条西20
森下幸一郎	北海道別海町役場
古川博	むつ市大湊上町25－33
横田義雄	仙台市原町1～2～31
阿部敏雄	酒田市亀ガ崎3
大森常三郎	福島県猪苗代町新町
本田清	新潟市一番堀通町教育庁社会教育課分室（日本白鳥の会事務局）
吉川吉枝	新潟市東中通1～86
阿部学	東京都世田谷区成城3～15 農林省官舎333
堀内磯一	東京都板橋区板下3～29 第二内田荘
監事	
佐藤尚幸	酒田市亀ガ崎3－1－5
会員	
玉田誠	網走市字北浜196
服部畦作	札幌市北区北37条西2丁目
瑞木博	根室市歯舞3－178
菊地正治	青森県南津軽郡藤崎町木挽町
畠山正光	青森県東津軽郡平内町小湊
相沢幸四郎	宮城県登米郡迫町新田駅前
上竹二郎	福島市大字岡部54
古川美忠雄	福島県猪苗代町大字長田
八木博	福島市大字鎌田字赤沼
松木勝彦	大宮市指扇大宮プラザ
細野七郎	神戸市灘区一王山町1～2
門脇益一	島根県東出雲町下意東497

ほかに委任状提出者　33名